

断行

大愛

大愛の動く所、火にも入るべし。水にも投ずべし。
日本を愛するもの日本のために死を決し、
大法を尊重信奉する者、大法のために死す。
虐げられたる人のためには、志士時に牢獄をも厭わず。

大愛は人を駆つて、必然の大道に奮起し躍進せしむ。

大愛の動く所、能、不能の分別なく、結果の善悪を超えてただ必然の一道あるのみ。
「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」

大愛即ちやむにやまれぬ心、

一切のはからいの役立たぬ心、

このやむにやまれぬ心、時に我が愛子を獅子の口より救い、

この心、時に国家社会を滅亡の淵より救う。

身に寸鉄をおびずして、武装せる山伏弁円をして大地に合掌せしめたる親鸞の念
仏。

三億二千万の印度民族を英国の支配より救わんとする聖ガンジーの大愛は、如何なる
強国にも勝ち得る英帝国の軍仏よりも強し。

匹夫下郎も敢てなさざる議会の醜状、大声叱呼、如何なる雄弁能弁も、悪質なるナ
ンセンスたるのみ。

夫を失える婦、我が子三人を連れて黙々の奮闘努力、見よ、その生活相の上に崇高
なる久遠の光横はる。

美婦の百態は悉く美、醜婦の百態は悉く醜、

大愛なき所、百態悉く死活動のみ。

大愛に終始する者は、断じて行う。

右に往くも可なり。左に往くも亦可なり。

鞭をもつて叱責するも可なり。春風駘蕩許したが上に許すも亦可なり。

私がまだ教育界にあつた頃、校長播磨権六氏と共に二ケ年間を暮した。

謹厳莊重、時に秋霜の如く鋭かった。

氏は私の上に強いた。厳しく強いた。私の上に断じて行つたのであつた。

如何に上出来の仕事をも褒めない。一枚の公文をも時に数回訂正して清書せしめ
る。鍛えに鍛えられた二ケ年間、時に恨む心さえおきる。

しかしかつて某郡を参観旅行に出かけた時のことであつた。某校長は丁寧私を
招じ入れて、

「あなたのことでしたか、あなたの校長と私とは友人ですが、播磨君は天下の首席教員中、俺の所の首席の右に出るものはいないと信ずると、そのあなたですか………」

まぶたが熱くなるのを感じた。私の上に断じて行かう氏の胸中、強き信あり、熱き愛あり、断じて行つたはずである。

ある学校では、放課後すぐ魚釣りに出かける者あり、囲碁にふけるものあり、しかも校長は徹底的に開放して責めない。然るにこの学校の成統は隆々として上つた。なぜか、いざとなれば時に夜を徹しても働く、一校拳つて個性の真骨頂を發揮して、人格独立の自由境に自覚的活動をなすが故であつた。自律の野に独創的手腕を發揮したが故である。

大愛の片鱗ただよう。放つても可なり、引きしめるも可なり。
大愛にさめたる者は断じて行かう。

学校や児童の嫌いな教員

寺や宗教のいやな僧侶

作物の可愛くない農夫

真理を熱愛せざる学著

国民と同心一体ならぬ政治家

そこに真の生活の喜びがあろうか。竹を割つたような断行があろうか。

鉄の如き意志

人ふるれば人を斬り、馬ふるれば馬を斬る。

断じて行い得ない者は迷う。

事に当る、熟慮せよ。真実の願望が生れる。

その願望が、不拔の意志によつて遂行せられる。

如何なる思想もこの尖鋭なる意志の動きに反影せざる限り、一片の空論のみ。

弱き善人は悲哀である。

悶々の情、内にみなざり、終生幽霊の如く、他の風むきに動かさる。

断じて行かう意志のない、英雄、偉人、聖者が一人でもあつたか。

前途に死の横わるを見るも、義のため、道のためには、一死以つて之を貫行する、これ大和魂の発露ではなかつたか。

前途に山なす怒濤が見える。断じて行え、怒濤が壊れる。

前途に百万の敵が見える。最後の五分間、忍苦、又忍苦、断じて行かう意志なくして勝利ありや。

些々たる非難の声を聞く。それをおそれる。

無責任なる反対に出会ふ。善人面がかまえたくなる。常識の輩と妥協する。

悪い権力がその行手をさえぎる。その権力に恐怖して意志がにぶる。弱き善人は哀れなる哉

鉄の如き意志の人となれ。

ウォルムスの屋根の瓦が一枚づつ鬼になるとも我は行く。そこにマルチンルーテがある。

「死罪に行はると雖も念仏を停止すべからず。」
そこに法然の信念の世界があつた。

出た杭はたたかれる。たたかれると止める。その生涯はそれでおわる。

たたかれても、弾圧されても、迫害されても、遂に如何ともすることの出来ない意志、

この人の前を如何なるものも妨げることは出来ない。

振上げられる槌は、この杭を益々強固に大地に樹てる。

燃ゆる魂、消えぬ火、鉄の如き意志は、この魂の動きである。

この魂の消えぬ限り、如何なるものもこの人を亡ぼすことは出来ない。

亡ぼすどころか、迫害や無意味なる弾歴はますます強力なるものに鍛えてゆく。

信念を根底とするあらゆる運動が、迫害によつて滅するかわりに益々根強くなり、尖鋭化する所以である。

鉄の如き意志をもて、断じて行かう所のみ人生がある。

この自律の意志のない所、善人といえども、一個の人形のみ、風のまにまに動く幽霊のみ。

人生は唯、この意志の人によつて動かさる。

我欲の奴隷

老人には、桃色な躍る魂がない。

老人でなくても、古ぼけた魂には躍る世界がない。

地位もいらず、名誉もいらず、富もいらず、命もいらぬ者ほど、困つた者はいない。然もこの人でなくては共に語るに足らないとは大西郷の言葉であつた。

金を出せというと後にひく。

地位を犠牲にせよと求める。姿を消す。

全身全霊を捧げよという。色を失つて逃げる。

凡そ、事を断じて行わんとする。一切を捨ててかからずして出来ることではない。

忠臣蔵の四十七士は金力では生れない。地位、名誉を求める心からも生れない。一死団結、全てを捧げて断行の志士によつて生れる。

高利貸の帖をくりつつ寺院に坐っている宗教家、

恩給高を計算しつつ、椅子にかじりついている教育家、

資本家に買取されている政治家、

世間の評判ばかり気にする名望家、
こうした人たちに、はつきりとした歩みがあるうはずがない。

我等が聖戦の陣営に、奮闘しつつある将士、
風が吹いても飛ばぬ。水にも溶けない、火にも焼けない、金剛の魂、その魂の持ち主だけが、持場を死守して後にひかない。
地位もなく、名誉もないのみか、借錢の唯中にある一匹の男、時に陣頭に立って、三軍を叱咤して大会を開く。

無産陣営の闘士たちを思う。地位どころか、名誉どころか、金どころか、牢獄をも厭わず、時に死すら決して闘ってゆく無産陣営の闘士たちを憶う。

光明団の陣営の闘士たちを憶う、日に夜に一文にもならぬどころか、泥の如く腐れた既成教団からは、迫害の矢が飛ぶ、覚めぬ民衆たちは、敵の如く攻撃する。そうした中に、地位も、名誉も、いいえ、命すらなげ出して、正法護持のために戦う同胞を憶う。

断じて行え、鬼神もさける。しかも敢えて断行せんとするならば、我欲へくくりつけられたる縛着の全ての綱を切れ。

理想

無理想の生存、これほど不甲斐ない一生涯があり得るか。

何故に左からおされたら右にふらふらし、右からおされたら左にふらふらするか。

無理想の生存だからである。

無理想の生存者、行くべき彼岸を持たず、歩むべき足を持たず、堂々たる歩みのないはずである。

因襲と、習性と、安価な褒貶と、泡沫の如き人気と、小さき皮相的価値を保たんとすめに、偽善の仮面をかぶる者、そは無道義の輩である。たとえ如何に善人といわれようとも無道義の幽霊である。

はつきりと理想が見える。

理想は高く現実を超越しつつも、現実に来て、深く現実の内奥に交渉する。

理想に燃える現実だけに、はつきりとした実践が生れる。

努力の全てをここに打ち込む。

いのちまで打ち込むから何事か出来る。出来るから喜びが生れる。いよいよ自信がつく。理想がはつきりする。

難関に遭遇する。敢ておしきる。苦難が人物を造る。力が生れる。

限りなき人生の創造がそこにある。

生きた木は伸びる。根は深まる。

伸びもせず、深まりもしなかつたら死んだのである。

無理想！ それは死んだことである。
無理想の青年がゴロゴロするほどいる。
無理想の、死の、国民が、社会が、団体が、人が………課長が、村長が、校長が、議員が。

夏の街の夜の散歩群のような、無理想の人の洪水から、どうして尊き人生が生まれよう。

行くべき世界を持つ者は歩み方からが違う。
人生五十年、ふらふらしていいものか。

理想をつかめ、大きな流れが見える。

真実以外、真理以外、理想以外の何ものにも仕えてはならない。

理想と現実との一致、そこに「信」が生れる。

問題はやがて信念の問題となる。

金剛の信

善悪を起え、賢愚を超えて、至善の絶対境に躍るものは金剛の信である。

瓦礫も変じて金となり、匹夫も化して勇者となる。

不滅の光を握って、人間苦悩に勝ちつづけつつ、不退転の大道を歩む。

大道即ち金剛の信。

如来というも、本願というも、信の本質、信の内奥に君臨する先験的實在に外ならず。

信とは自覚の相である。

信とは全身全霊を捧げた相である。

信とは人格統一の相である。

信とは大愛に生かされた相である。

信とは自己を知った相である。

倍とは救われきった相である。

信なければ八万の経蔵を読破するも愚者であり、信ずれば一文不知の老婆と雖も智者であるとは、蓮如上人の言葉である。

生死輪転の家にかえり来ることは、決するに疑情を以って所止となし、速に寂靜無為の樂に入ることは、必ず信心を以って能入となすとは、聖法然の断定であった。

信なる哉、信念なる哉、

自信なき所、断行あることなし。

寸に満たざる秋の夜の虫の声、時に人の行歩を停めて聞きほれしむ。

三歳の童子、一言時に大人の肺腑をつく。

何が故の空言ぞや。

曰く自信なき千言万語、一刀両断の切味あることなし。

柔らかに出でて悪く、強く出でて猶更悪し。悪きが故に周章狼狽、自ら窮して、人を恨み、世を怒る。

何が故に右顧左眄ぞや。

何が故に朝令暮改ぞや。

屠所にひかれる羊の如く、絞首台上に足を運ぶ死刑囚の如く、鬱々として業務にひかれ、時に流さる。

灰色以上の何ものがある。

人知らずしていからず、また君子ならずや、とは孔子の言。

疑われて弁解せず。世認めずとも曇らず。

万人去るも悲痛せず。万人来るも亦誇らず。

駄々として全我を打ち込んで法悦の境に安住す。

彼は何と語り、彼は何に慰めらるるのか。

悠々たる彼を見よ。

微笑せる彼を見よ。

時に一刀両断、秋水の如き切味、彼の前を碍げる何ものもあることなし。

親鸞聖人曰く。

「念仏者は無碍の一道なり。そのいわれ如何とならば、信心の行者には、天神地祇も敬服し、魔界外道も障碍することなし。……………」

煮ても食われず、焼いても食われず。

地獄の火炎も、天上の栄華も、遂に彼を如何ともすること難し。

大愛に生きよ。

鉄の如き意志をもて

我欲の奴隷たること勿れ

高き理想をつかめ

金剛の信に生きよ。

この人にして断行の醍醐味を知る。

断じて行え、鬼神も避ける。敢て重ねてこれを言う。